

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 24 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2012

課題番号：20520410

研究課題名（和文） 日本語における階層化された対話についての研究：終助詞「ね」「よ」「よね」を中心に

研究課題名（英文） A Study on Configuration Dialogue in Japanese: Focusing on Sentence-Final Particles *ne*, *yo* and *yone*.

研究代表者

中田一志 (NAKATA, HITOSHI)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・教授

研究者番号：90252741

研究成果の概要（和文）：

単独の終助詞「よ」「ね」がついた文の意味を Searle の発話行為の適切性条件の事前条件と誠実性条件から特定できる理論を提出した。これにより発話行為の型に応じた終助詞の意味の違いが特定できる。

この理論は発話行為を明示的に示す文だけでなく、非明示的な文に終助詞がついたものまで適用可能である。日本語では、明示的な発話行為を示すことが避けられる傾向があり、陳述文に終助詞をつけたもので代用され、この場合の意味もこの理論では予測可能である。

研究成果の概要（英文）：

A useful theory has been proposed, by which the meanings of sentences with the sentence-final particle *yo* and *ne* are determined by means of the preparatory condition and the sincerity condition of Searle's felicity conditions of speech acts. By virtue of the theory, the divergences of meaning of the particles are specified by the type of speech acts. The theory covers not only sentences explicit in speech act, but it also covers those implicit in speech act and predicts the meanings, although in Japanese explicit expressions tend to be avoided and be replaced by implicit expressions together with the sentence-final particles.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：言語学分野

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：終助詞，よ，ね，発話行為，適切性条件，対話，会話，記述的研究，丁寧さの原則，のだ

1. 研究開始当初の背景

終助詞「ね」「よ」「よね」については、話し手と聞き手の情報や知識が関わるとする研究はその用例への適用率が高いという意

味で未だに影響力が強い。「絶対的な情報帰属」(益岡 1991), 「相対的な距離」(神尾 1990), 「量的な情報帰属」(金水 1991, メイナード 1993) が代表的な研究である。しかしながら、

それで説明できない非典型例も一般に認められ(小野・中川 1997 など), 認知や談話・対話に関する理論的枠組みが提唱されてきた。(片桐 1995, 小野・中川 1997, 金水・田窪 1998 など) また, 会話分析の隣接対(Schegloff and Sacks 1973 など) という概念を用いながら, 対話の中に現れるこれらの終助詞の使われる型を概観した先駆的な研究もある(中田 2007) が, 終助詞の多様な出現型があり, 会話分析の手法を用いるには限界があった。

2. 研究の目的

本研究は, 日本語において, (1)発話を行うときの発話行為の適切性条件(Searle 1969)と終助詞「よ」「ね」「よね」の使用が関与する原理を明らかにし(原理の解明), (2)その原理が話し手と聞き手との相互作用からなる対話やその総体としての会話の構造に拡大し, 適用できることを検証し(対話や会話への原理適用の可能性の検証), (3)対話や会話の構造の中で, 聞き手の理解に応じてとられる話し手の手法, 別の言い方をすると, これらの終助詞の特定の組み合わせとパターンによって階層的で動的な対話や会話を構成している状況を網羅的に調査する(対話や会話の階層性と動態性の調査)ことを目的としている。

3. 研究の方法

研究の目的別に本研究の方法をまとめると次のようになる。

研究の目的 1 (原理の解明) に関して:

単独の終助詞「よ」「ね」がついた文の意味がどんな原理に基づいているかを解明するために, 言語行為別に終助詞がついた文の用例を採集し, 発話の状況, 発話者の心理状況などを手がかりに用例を整理する。背景的には Searle の発話行為の適切性条件と関連性があることを予測している。

複合的な終助詞「よね」がついた文の意味を求めて, 「直接形+よね」「のだ形+よね」「て形+よね」の 3 つに類型に用例を整理する。その背景には形式的な違いがその意味の違いに反映しているという言語事実からその妥当性を予測している。さらにそれぞれの類型の下位分類を整理する。

研究の目的 2 (対話や会話への原理適用の可能性の検証) に関して:

単独の終助詞「よ」「ね」がついた文がそれぞれの原理的な意味をどのように応用すれば対話や会話で使われる文の意味に変換できるかを考察する。その背景には明示的な発話行為を表さない, いわゆる陳述文に終助詞がついた文がときおり別の発話行為を表

す場合があることから予測している。

研究の目的 3 (対話や会話の階層性と動態性の調査) に関して:

単独の終助詞「よ」「ね」がついた文は原理的にその文で意図された発話行為のある条件を焦点化すると仮定すると, 発話行為が明示的なものはその形式から終助詞の意味を予測することができる。さらに非明示的なものでもその文(特に陳述文)が発話された状況や発話者と相手の関係などの語用論的条件から終助詞の意味を予測可能であるはずであるという予測のもと, その語用論的条件を明らかにする。

4. 研究成果

研究の目的別に本研究の成果をまとめると次のようになる。

研究の目的 1 (原理の解明) に関して:

単独の終助詞「よ」と「ね」に関しては, 学会発表「終助詞ヨ, ネと発話行為の適切性条件」およびそれを発展的にまとめた雑誌論文「発話行為論から見た終助詞ヨとネ」で, Searle の発話行為の適切性条件にもとづき終助詞ヨとネの語用論的/意味論的な意味を求め, 次の主張をした。

- ・終助詞ヨは発話行為の事前条件を焦点化する。
- ・終助詞ネは発話行為の誠実性条件を焦点化する。

発話(行為)の型によって焦点化される内容が異なり, 発話(行為)の型に応じた終助詞の意味を明示的に示せるという意味で学会でも高く評価されている。具体的な評価は, 宮崎和人氏「2008年-2009年における日本語学会の展望 文法(理論・現代)」(『日本語の研究』6-3, 日本語学会, 2010年6月, 32頁)および学会誌展望小委員会「日本語文法学会の展望」(『日本語文法』13-1, 日本語文法学会, 2013年3月, 138頁)を参照されたい。

また, Searle の発話行為論の観点から終助詞研究を振り返り, 発話者の行為と終助詞の関係を代表的な研究がどのように捉えていたかを雑誌論文「発話行為論的観点による終助詞ヨとネの先行研究」で浮き彫りにした。

複合形式の終助詞「よね」に関しては, まず研究史をコミュニケーション行為の観点からとらえ直し, 雑誌論文「コミュニケーション行為としての終助詞ヨネ: 先行研究をめぐって」で研究の方向性をしめた。そして, この「よね」文の文法的記述には「直接形+よね」文, 「のだ形+よね」文, 「て形+よね」文の 3 つの類型に分けることが必要でかつ有効であることを学会発表「終助詞ヨネの意味と用法」で示した。なお, 「のだ形+よね」

文の文法記述に必要な「のだ」文の解明のため、雑誌論文「「のだ」の過程用法と結果用法」で用法を明らかにした。これは「よね」と関連する「のだ」文のみを記述したもので、さらに総体的な記述を目指して、学会発表「「のだ」の意味構造の構築に向けて」で認知意味論的な記述の可能性を示した。これらの研究を通して、複合形式「よね」の文法的記述をするための万全の準備を整えた。

研究の目的2（対話や会話への原理適用の可能性の検証）に関して：

学会発表「終助詞ヨ、ネと発話行為の適切性条件」および雑誌論文「終助詞ヨ、ネと発話行為の適切性条件」で、発話における原理が会話に拡大して適用可能である例を示した。さらに、原理が対話や会話に適用できるのであれば、終助詞「よ」「ね」の原理に関する理論的研究を言語教育に適用可能な形式に変換することにも通じることとなり、応用言語学的にもその重要性を示すことができると思われる。

終助詞の原理的な意味をもとにしながら、音声情報や文脈情報などを手がかりにして、状況によって終助詞が帯びるさまざまな意味を特定する方法を、学会発表「日本語の会話における終助詞ヨとネについて」および国際的な学会発表「終助詞ヨとネの意味を予測する」および雑誌論文「終助詞ヨとネの意味を予測する」で終助詞の原理が会話や対話でも適用が可能であることを示した。

研究の目的3（対話や会話の階層性と動態性の調査）に関して：

陳述文に終助詞「よ」や「ね」をつけた文がどのような語用論的な条件からどんな意味に特定化されるかを発話者の発話（行為）から分析し、国際的な学会発表「日本語の会話の文法：終助詞ヨとネを中心に」で発表した。さらに、語用論的な条件を精査した結果、Leechの丁寧さの原則と終助詞の使用が大きく関わり、会話で頻出する「陳述文+よ/ね」で明示的な発話行為文の代用がされていること、その形で発話行為をOFF THE RECORDの形で間接的な発話行為を表すことができることなどを、国際的な学会発表「終助詞「よ」と「ね」の会話の文法」で明らかにした。

終助詞の原理的な意味を探究する研究は形式と意味の関係を精査しようとするのに対して、これらの研究は発話者が相手との関係である条件の時、どの言語形式をとるのが適切であるか、形式と意味と会話や対話の参加者の関係を精査しようというものであり、言語使用を中心とした会話教育ではますます重要になると思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6件）

①中田一志, 「「のだ」の過程用法と結果用法」, 『日本語・日本文化』第38号, 19頁～51頁, 2012年3月, 査読なし

②中田一志, 「終助詞ヨとネの意味を予測する」, Conference Handbook of Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), pp. 70-71, 2012年2月, 査読有

③中田一志, 「コミュニケーション行為としての終助詞ヨネ：先行研究をめぐって」, 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』第17号, 13頁～26頁, 2010年3月, 査読なし

④中田一志, 「発話行為論から見た終助詞ヨとネ」, 『日本語文法』9巻2号, 19頁～35頁, 2009年9月, 査読有

⑤中田一志, 「発話行為論的観点による終助詞ヨとネの先行研究」, 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』第16号, 51頁～62頁, 2009年3月, 査読なし

⑥中田一志, 「終助詞ヨ、ネと発話行為の適切性条件」, 『第9回日本語文法学会大会発表予稿集』, 109頁～118頁, 2008年, 査読有

〔学会発表〕（計 6件）

①中田一志, 「終助詞「よ」と「ね」の会話の文法」, The Fourth Conference on Japanese Linguistics and Language Teaching (The Italian Association for Japanese Language Teaching, AIDLG4), 2013年3月21日～23日, ナポリ東洋大学

②中田一志, 「「のだ」の意味構造の構築に向けて」, The Fourth International Seminar on Japanese Linguistics and Japanese Language Education (招待講演), インドネシア教育大学大学院

③中田一志, 「終助詞ヨネの意味と用法」, 第13回日本語日本文化研究会, 2012年3月17日, 大阪大学

④中田一志, 「終助詞ヨとネの意味を予測する」, The Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), 2011年3月6日, San Francisco State University.

⑤中田一志,「日本語の会話の文法：終助詞ヨとネを中心に」(基調講演),第2回国際セミナー・日本語教育と日本文化 2010,2010年2月23日,インドネシア教育大学大学院

⑥中田一志,「終助詞ヨ,ネと発話行為の適切性条件」,日本語文法学会第9回大会パネルセッション「聞き手の知識」再考—日本語の文末形式の機能をめぐって—,2008年10月19日,甲南大学

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

http://cjl.c.osaka-u.ac.jp/~hitoshi_nakata/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田一志 (NAKATA HITOSHI)
大阪大学・日本語日本文化教育センター・
教授
研究者番号：90252741

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし